高安千塚古墳群について

生駒山系の山すそを歩いていると、時どき、大きな石で組まれたほら穴のようなものを目にすることがあります。むかしの人は、これを古代人の住まいだ、とか色いろ想像をめぐらせてきましたが、実は、こうした穴は、6 世紀、今から 1600 年くらい前の人のお墓（古墳）の一部、棺おけを収めていた空間なのです。その上を覆っていた土は、大雨などで流されてしまって、石で組まれていて非常に頑丈な部分だけが、現在その姿を残しています。

すべての古墳にこうした石組みが存在するわけではなく、たとえば、先年、世界遺産にも登録され、世界最大のお墓として有名な堺の仁徳天皇陵古墳（大仙古墳）などにはありません。そうした巨大古墳の築造が一段落したあと、朝鮮半島のお墓の形態が新たに採用され、石組みを持つお墓が登場したのです。

そこで、自分たちの生活圏から近く、良質な石が採れる生駒山系に、たくさんのお墓が作られるようになります。その何割かは、石組みの様式を持ち込んだ大陸・半島出身の人びと（渡来人）のお墓だと考えられています。彼らは、文字を操ることができたり、製鉄の技術を持っていたり、堤防を築く技術を持っていたりしたので、当時の王権に重用され、お墓を作ることが許されたのです。公務員の元祖、と言えるかもしれません。

長い月日をかけて、古墳の研究はずいぶん深化してきました。その理由は、古墳の表現（死後の世界）を調べることで、今となっては直接わからない、当時の社会のあり方（現実の世界）が垣間見えるからです。そして、石組みを持ったお墓の採用は、現在に至る大きな歴史の転換点だったことがわかりました。かいつまんで言うと、それは、一家の主である父を頂点とした、「家」の成立と大きく関わっているのです。

それまでの古墳は、戦争の英雄、シャーマンなど、ある特定の人物のために築造されました。だから、基本的に、埋葬は一回きりです。ところが、「家」の仕組みが導入されて、「家」単位のお墓が求められるようになると、一つのお墓に、何回も埋葬を行なう仕組みを作られなくてはいけません。それを可能にするのが、あの石組みです。お葬式のたびに、石組みのなかの空間を開け閉めして、一家の人びとを順に埋葬したのです。

渡来人がもたらした「家」の仕組みは、その後、日本列島に広く普及し、埋葬方法こそ土葬から火葬に変化しましたが、現在のお墓にも採用されています。ということは、（こういう言い方をしなくても、当たり前ですが）現在の現実社会にも存在しています。それがどのように始まったのか、1600 年前の古墳が教えています。

石組みを持った古墳は、失われたものも含めて、いわゆる「高安千塚古墳群」だけで 400 基、生駒山系全体では数千という単位で存在すると言われています。古墳を見つけた際は、ぜひ、こうした日本列島の長い歴史に思いをはせてみてください。